

8. ビッグバンと不思議な力

各務原市立稲羽東小学校

6年 加藤 優佳 小島 実

↓

敦賀市立常宮小学校

5年 原 百花 山本 千智

私は、一年前、とても不思議な体験をした。それまでは、ただの小学生として普通の生活をしていた。

そう、彼と出会うまでは……。

—— 一年前。

息が真っ白になるくらい寒い一月末の夕方、学校帰りのことだった。

「寒ーい」

カノンはふるえながら言った。カノンは、寒い冬が大嫌いだった。

「早く帰りたいーい」

と、カノンがぶつぶつ言っていると、足下に温かい物を感じた。不思議に思って見てみると、なんと小さなうさぎがそこにいたのだ。うさぎは、大きさが十五センチメートルぐらいで、薄いピンク色をしていた。カノンは目をキラキラさせて、

「かわい～。メス、メス～」

と、うさぎにほおずりをした。すると、うさぎは、

「ちょっと放して。ぼくは宇宙人だ。しかもぼくはメスじゃない。オスだ～」

「え～！」

カノンはすごく驚いた。しかし、しばらくすると、

「んっ、待てよ。今、宇宙人って言ったよね。何で宇宙人がここにいるわけ？ 君はもしかして地球を征服しようとしているの？」

「ちがう、ちがう、ちがう」

と、あわててうさぎは言い、少し落ち着くと、

「ぼくはビッグバンを止めに来たんだ」

「ビッグバン？ 何っ、それ」

うさぎがあまりにも真剣な顔で言ったので、カノンは少しとまどった。

「詳しい話は、君の家でしょう」

と言うと、うさぎは歩き出した。カノンもうさぎの後を追って歩いた。

家に帰ると、カノンとうさぎは二階のカノンの部屋に入った。幸いカノンがうさぎを連れて帰って来たことはばれなかった。

ソファに座ると、うさぎは話し始めた。

「ビッグバンとは、宇宙で起こる大爆発のことで、ぼくたちが住んでいる星と地球の近くで一か月後に起きるんだ。だから、ぼくたち星の者と、この地球の選ばれし者とが二

人で協力して止めるんだ」

「で、その選ばれし者が私なの？」

あまりに突然のことなので、カノンとはまどった。しばらくして気持ちが落ち着くと、カノンはうさぎに聞いた。

「で、協力してって言うけど、どう協力すればいいの？」

「えーっと……」

と、うさぎは言いながらカノンから目を離す。

「もしかして、忘れたの？」

カノンが聞くと、うさぎは小さくうなずいた。

「先生なら分かるかも」

と、うさぎは言って、自分の耳から自分より大きな機械を取り出し、何か通信を始めた。

「☆○×□△？ ○△×☆*○△」

「……何を話していたの？」

と、カノンが聞いた。

「それが……なんだか記憶が全てなくなっちゃったみたいなんだよ……」

ということで、彼、そう、うさぎが思い出すのを待つことにした。

しかし、なかなか思い出せないうさぎ。いったいどうなるのか。

「うーん。どうしよう」

カノンは考えた。

「あっ！ もしかしたら、宇宙に何かあるんじゃないかな？ だから宇宙に行ってみれば、何か思い出すかもしれないよ！」

「そうか！ そういうこともあるな！ でもどうやって宇宙に行くの？」

「え、えーっと……。そうだ！ ぼくの名前はロビー・フラッシュ！」

「よろしく、ロビー・フラッシュ。私はカノン。それで、ロビーは、どうやって地球にやって来たの？ それを使えば宇宙に行けないの？」

「そうか！ でも、それを作るには一か月以上もかかってしまう。そうするとビッグバンも止めることができないんだよ」

「じゃあどうしよう」

カノンはすごく考えた。するとロビーが言った。

「もしかしたら、あいつらの記憶はなくなっていないかも知れない。通信してみよう」

「あいつらって？」

どうもロビーには他に仲間がいて、彼らはロビーがもどって来るまで地下室に隠れているらしい。だから、外の世界のことを何も知らず、ロビーのように記憶喪失にはなっていない可能性が高いというのだ。

「☆○×□△？ ○△×☆*○△」

しばらくの間、ロビーは何語か分からない文字でメモを取ったり、話したりしていた。

「ねえ、どうしたの？ 何を話していたの？ 何かあったの？」

と、カノンはロビーに聞いた。

「いや、今日の真夜中に、この地球……いや、君の部屋に仲間が来るんだ。しかし問題

はそこじゃない。わざわざ来るのだから、地球の何かを必要としているはずなんだ。土？ 水？ 鉄？ 木？ あー、いったい何を宇宙に持っていけばいいんだ！ 全く分からないよ！ あー、どうしよう、どうしよう……」

「ねえ、この部屋の中に使えそうな物はないの？」

「うーん、どうだろう……」

ロビーは悩んだ末、なにやら奇妙な機械を耳から取り出したのだった。★

それは、カノンが見たこともないようなものだった。カメレオンみtainな色のボタンがついていて、ときどき色が変わる。カノンは目を丸くした。

「ロビー、それは何？」

「これのこと？ これはね、地球でいうとケイタイだよ」

「へ～。そんなケイタイがあるんだ。私のケイタイとはずいぶんちがうね」

カノンは自分のけい帯電話をカバンからとりだした。大好きなストラップがたくさん付いている。一番のお気に入りにはゴマちゃんのぬいぐるみが付いたやつだ。手のひらくらいの大きさで、かんじんのけい帯電話がかくれて見えないくらいだ。

「あ！」

カノンがけい帯を出したとたん、ロビーがさげんだ。

「そ、そ、それは……」

「え？ 私のケイタイだけど。このゴマちゃんのストラップ、お気に入りなんだよね。かわいいでしょ。そういえばロビー、なんとなくあなたに似てるかも。あはははは」

「ちがうよ、そうじゃなくて。その横に付いてるやつ。それ、水晶玉だよね」

どうもロビーは、たくさん付いたストラップの中のひとつ、水晶玉に目をつけたらしい。

「思い出したよ。そうだよ、ぼくが見つめてくるのは水と光のアイテム。つまり水晶玉だったんだよ。その輝きを見たら、思い出したよ」

ロビーはずいぶんとすっきりした顔をしている。記憶がもどってうれしそうだ。そんなロビーを見ていたら、カノンも何だか幸せな気分になってきた。

「わかったよ、ロビー。こんなストラップの水晶玉でよかったら、持っていきなよ」

「ありがとう。これでビッグバンを止められるぞ」

その言葉を言い終わらないうちに、まどの外が光った。ロビーの仲間がやって来たのだ。

「☆○×□△？ ☆◎*○△」

「△☆●◎□！ ○♪△□★」

やっぱりカノンには何を話しているかわからない。そんなカノンに気付いて、ロビーが言った。

「カノン、こいつらはぼくの仲間。こっちはオスのロジャー、あっちはメスのロミー」

「かわい～」

カノンは初めてロビーを見たときと同じように、ロジャーとロミーにほおずりをした。どちらもおとなしい性格のようだ。

「カノン、ぼくたちはそろそろ行かなきゃ。君のおかげで助かった、ありがとう」

カノンは、なんだか泣きそうになった。

「うん。ビッグバンのこと、たのんだよ」

私はいつも通りの毎日にもどっていた。やっぱりただの小学生。学校も楽しい。ビッグバンが起これると心配された日には、結局何も起こらなかった。きっとロビーたちが何とかしたにちがいない。

「寒ーい。早く帰りたいーい」

カノンがぶつぶつ言っていると、足下に温かい物を感じた。カノンは目をキラキラさせて言った。

「ロビー！ もどってきたの？」